



門 遠
番 1449
卷 4

競奇遺聞 卷の四

天物

靴馬山と雲布祿との間小岩谷あり名を傳正谷と
し世に傳ふ源牛若祿の名ハ今於王九年迄の礼を
遁れて靴も穿ふ入一日僧正なる少む異人小遇ふ
牛若小者ふ銀術をとりても且盟く云ぬ今於王の
護神をんとす後時々異人と傳正なる名み遇ふ言
ま刺較の法を習ふ牛若もより輕捷とあつて
益精一十区兼ふ及んく奥効ふ行

競奇遺聞 卷の四

素永元曆のる平氏と合戦ふも功多し一文化の物
 再い結る山止りふ異人んゆも事をはりし一
 其物と結るるもの多し一も靈鬼の中一も較著
 ありあると結ぶてて物らふあれ虫尤旗星のそふ
 あらうらへ主頼の中結る僧正を巨魁とて世の結る
 ところ結る山の僧正も常山の大席は良の次席伊勢宗
 之席 富士太席 上野妙法坊 常陸筑波の法衣彦山
 豊前坊大山の伯耆坊 大峯 善鬼 金平と叡山の
 法住坊 肥後河内 和歌山葛城の行者も同坊も雄

内供奉 妙法正統のて結るあゆみの結ぶ 或ハ物と
 かり童とかりあゆむを結ぶゆりて免ゆ一亦ハ
 僧山伏とぬく人る小交る或ハ佛葬の相とて
 出現するを結ぶ 曰人の福をえそを結ぶて禮とて
 世のほふ遇つてハ則禮して乱るるや 或ハ火災
 を結ぶ一或ハ閑静を起し歴代のそ子のら
 禮夜院ハ金色のきもてそ長一丈餘後寺洞院ハ
 被髪長翼の沙門とハ後醍醐院ハ鼻勾爪の王
 とハ五緒の車ふ余れそ余尚多し一又沙門の

懐心及び慈悲怒り者多の天物と云西陽柳本
 紀傳正ハ云維寧ふ今大博心と紀次意も
 群多し同く横川の松小翔王慈恵を甲曹を着
 して三井寺を攻め千手院を焼又覺敏魔心致
 起して傳法院を營け高野山の元住よりさき
 号人瘦う房を攻め号人瘦うと云く不勤母る眾徒の云
 あれも千手院を焼と云く血流る
 元徒大よ叫んで批裡あり次大物より不勤ふ
 ありと云れ是後之を後多御書乃法等は法師相尋

一とこれハ是昔人後へ目と怒一人を睨之火なるを
 雨く燭中一焼うらうらも山雨く弄して云我く
 昂身成佛の印を焼と云れ奥部一奥秘の印と云
 又和州堯佐天物の言をうして昔又告て、
 これ中の院に僧都之浮屠巫祝豈能これを降せんや
 神力何る者三百余教いめくうする僧頑師たりと
 ともも除除ふ及んく多の魔撓小遭小塔より云
 ともも之小野文觀ハ天子と初のなり平族を討て
 元弘の乱の起一或ハ疎石好言くうて云る氏

義直同胞の恩とまひ師直師素をくく君臣の
礼を乖しむらうしむらうくお出雲の西をく行細川
晴元嗣子一也宿山小初りて政元と彦一政元
信管信ともる際非して出雲とくせあれと系て祠と
建るあれ也宿の業術太席の属なり真如を
出羽玉羽黒山の山伏名ハ雲景とくあゆめ
初んとて老山伏小遇りて誘引せしむる宿山小
中一座中小美傍ゆくとるあかれ告て云是所習
舌舐真海寛知慈惠頼豪仁海とそ上の座の

人ハは後路帝井上皇后とる衣龍と名一日月星と
繡あり一ひと命を捧と崇徳院金のぎるとめて
大翅を展源為朝ハ片葉は横とくま備ふくま
後多相院後醍醐帝一も席を同とくま一各世君
治乱興亡のそを治む已あしてま系降らんともれ
老山伏告てあく太席治が居所ありま京夢の
くくあして告るそ所惘然とて大内の舊治掠
乃本のト少あり

巨勢か金固

巨勢の金園ハ本朝圖書の大祖にして項年世より
 今度詔を奉りて御宸殿の賢聖の
 漢唐の名にの圖を畫し
 公卿百官あれとらる毎ふ己が心のついで
 國ハ山を多し半一十重を遠近を各に梁の
 文彦くつあき後お工りてまふ緑をを水波はし
 今一示して之ハ唯ま大底あれハきをの彩色より
 當山を幾重も多し半一十重を遠近を各に梁の
 廣は云既ふ山を多し半一十重師ふ及らるる今重

ありこり然るに又そ廣はが子孫はつわき致て未
 山を多し半一十重を遠近を各に梁の
 四重師もあるも遥ふ七重何の形やう世より業を
 傳人風を續とらるんやと筆と抱て出せり
 かる希代の金園るれハ佛神諸天の靈像も出ぬに
 通して書出とられハ後漢の世祖先光武の筆ハ
 二十八將唐の大祖の政を論き十八學士を始して
 面容体佩それの傳を考く写し出さるる其
 小謂うらと儲しと延森の聖代ああれを道風



Figure 14



Figure 15
松坐画

Figure 16

小玉泣を告書し老翁子誠まことう意儀こころづの述つり奉ほう今に
始はじめ凡たゞ曹そう弗ふつ興こうつが新しんの結むすを早はや小雨こゆめを乞こく民たみを潤うる澤たくず
むられは厚あつ生せい小一人こひとりの畫え師しなりも所ところやもめられは皆みな
妻つまを求もとんと欺ごまかす一ひとらから何なにもあらず一ひと目ひとめ一ひとら
乃すなは内うち小一人こひとりの員いん女にょあうそ汝なんぢ幸さい來らい妻つま紙かみ亦またひ予よ不ふ敏びん
形かたちとつても今いまより一ひとつひ市いちの宿しゆくたたく人ひとをよまそ
行ゆ新しん倫りん小文こぶん女にょの如ごとく佩はい玉ぎよく金かね釵かんざしを麗うる麗うる一ひと海うみ繡しゆく
と帝てい一ひと羅ら縷らを粉こな小畫こゑ工こうのまく君きみをわれ唐たう人にん民たみを
乃すなは婦ふ小慈こじをびいうでわかれ小婦こふきんや一ひとつひ女にょ答こたてま

婦人ふとんハまれ妻つま媼おんを論ろんぶるは只ただを心こころ探たんをもめひ
のまけり君きみ汝なんぢ毎まい月げつ婦ふを撰せんんといまご求もとめをわれ
幸さい小こ又またまれば公こう小婦こふきんゆ小茂こもうをたつ必かならまるとんよ
佐さ夫つと大だい小こ信しんを絶たつ心こころを盟めい初はつを遣つかへむをよこし已おのく事こと
小釵こかんざしを解とく與あへ一ひとく女にょを慶うらやむる也なり有あるか酒さけを推おし乃すなは
胸むねと息いきハ羨うらやみ忽たちち号なげふたり佐さ夫つと大だい小こ嘆たん息いきして責せめて
の事こと小こ玉たま貌ようを忘れぬと云いふ佐さ夫つと大だい小こ信しんを解とく一ひとく碎くる無なきれ
羨うらや中の姿すがた小こ女にょあしもかりば能たか似にたり佐さ夫つと大だい小こ信しんを解とく一ひとく
終すま末ま都ともつひ無なきりて翌あ三日みか日ひを早はや飲いん食しょく終すまひてま

意慕の痴の身一却沈つ有れハゆ之小及んで疲果て
少し枕を修し以ておろ乃女又まつて何とてさやう小現
公の申すまぬやられ藝幼小伝き事りこそとてたり小
件の短カと持たふ一の酒壺を掲ぐおぼやうこれ後工
及くし程敷ひく良えし心と静めておの女をくハの
々これ玉箒の以午と丸尾玉小簪蟬娟の髪青蛾乃
眉佩帯玉趾あつ所をく括扱とる小實の人こそ其上
は夕阿とくし小奴敷お所るれをばく六是神仙
れ我小お福を與人とて奉れ者考とて察部られバ

則率ひて室酒小入れ件の室壺れ酒をばく借老
乃坊をさうし物々こそ水もゆぬ小お興火善炊の言
きり狂拵彷彿の業まても張あつて路ハ一とせ
くあり小畫工むし小十倍一盛當てととせを纏れハ
一人の男子を依とらうりさるぐけしを大切小おらう
育り子備の小見小思さうて幼きり聰の敵智世とふこれ
や一何と付小見筆をさるく父の影を写し畫く父は付
小思ひ出むし一長一短が形を尋ねる小使おれしは
見の玄毎の貌ハ写ふもらうねん父の形と某写はん

三日ふく書るるをひつらひ父も及ひてくわん地の絵
 を書とつてつれ文學小志あり繪上の筆文あり
 してそ後を再ひ絵を書けり書聖經賢侍中眼を
 さしらるる十五歳少く博士と稱り對策及弟の礼
 終るるく天下お名ゆゆ一 文者として倅録心の終
 りう一が又阿る東の友お母の英人父お告て云お子已に
 文道の卷世やある一倅録成り余を之由人おふ
 足あれゆとてくみづる故郷お帰る今八何を包
 る記われハ神仙の類も非だ又批裡おしおり

君の年未盡あつる人形の精求お何を婦人として
 来りて去極ふりれ君おはつて十八年を経る間ハ
 かの絵の貌ハ滅るゆ一今より又繪像とて
 お子の為にお祭を受ん清成もやうて空くおん
 そ後ハ子れ登るる像ハ魂を藏じべりともに並
 孝子れお小守の神とぬづることとて終るる一ハ
 夏多るるお遺るハこれ終像のて又ハ同絶辟地
 して位悲しきも甲州多る一とて終懺悔し
 て終るるおありおり其子ハ齋の國おはつて

王偉義とらるる大夫あれ之父母をみまはれ繪像を
御さられまはせし異國類策小書れり
然れハ今賢聖降り乃像も魂入くおのりて
守備一倭女を懲一世の固と成ぬ

生馬仙人

生馬仙人を松津國伊香縣人河内の高野
小入東宮の御小侍寛平九年斗撒れ像
の達とて考あり東山の山嶺小入一菴の谷中小
阿るをらりてそ所不別る小菴中一人有る

黄栗の白帽を披素衣を着るの達問て
何人とも答へられ先生馬の仙人之侍小入
あねをみりての達お味を又問て
飢を瘠れ喰ふ味甚美之味を又問て
公卿をみりて居る事何かく知る生馬仙人答て云
れれ山小入く二千年載りて山の麓とて
の達帰くけ事を傳ふ
唐船漂著
近江新を以て城東郡横次賀乃城南今津浦

十二月四日船儀渡らるる唐船標を浦人等
 立生るる船の長九三間計上格子通ハ赤く下の方
 水際為白く油石灰みかめらるるものとも
 帆柱大まき船の中やんけ板の中級ふ白く
 旗あり長さ一尺巾一尺計若くは帆柱小舟船の方
 孔柱の小舟五色の吹板二舟船の方小幡を中あり
 赤白く中ふ赤丸筋程の繩のありしりき体
 異格ふんく舟船中うし流敷を鳴りしけ方の音を
 招きし格ふんくやみさうり今浦より城至る江を

いししき法を出馬まき見合ある一書小横江か夫乃
 役人弓三千張鉄炮四十挺各握々繩の付入城され
 紋有り又甲冑を持せりもも出浦器乗れもさなり
 鉄炮乃將率おのく肩小尚革を熟備ん中い交
 横江か夫の城れ西南を席助新田と湊村よの浦場
 磯邊より二十丁斗沖小掛る回り横江か夫の法士甲
 冑兵具持せ組子ハ弓鉄炮上下四首傳人太席助浦
 邊張も頭もそのハ幕中に陣烈し將率弓
 鉄炮を備へる浪舟渡ふさびあふ入火飲肉

浦し、松本江集あて大船を焼翌五日掛川より諸士
 上下音解人無名石大矢お士平ふ持せ其後雁代村へ
 出張あり興雁代村八太郎助新田六日早船渡村の徳士ら
 十五張銃炮廿五挺大筒をも持せ人救九二百人そのうち
 小島村へ少く張とは小島村ハ雁代村より二里斗右四面所
 におぼれの上少船より船中乃松子お細ひは長業あり
 往來の高船あり船中の人救八十人書翰とて
 たる小同答あり糧米穀水盡くけ方のたを
 取ひし等とて少く是く書翰をきく人お事と

あつては酒流のころ船も控船もあつては難儀は俵
 だけ方乃助をもちあつては八日横濱から水新
 年甲と送りぬ又公令ありて唐へも上陸の役あり
 一の事ありて厳重小破る幕を打せ圍ひ唐人
 入るを設け東乃方ありて横濱を尾家乃諸士
 西乃方ありて懸川に結せ松本より浪井渡りて並立て
 船を縛く少くは唐へも送ひし事あり
 其具おられぬといふ上陸して一集を輝返の体ふ
 ようて書とて風波の強も是事おく達て上陸

〜船も一乗り六衛少船も梅りそ二十人上陸
〜あやしの間入る唐人〜一回小洋屋し
〜法王のめん〜安ん波びてかれあも今抱り
さねのりもありの唐人も上陸りてせまてと唐人
半六人の内様も多し甲十人熱門く口十人由乳様は
りてとを帝助杉田のき院と庄屋乃宅へ入れはるを
かり法王益東警固りし船も一け五菜 水至
りて一け五菜二葉と多〜の郷長應はりて
掛川の方も同様のよう〜ふまゝ然る所九々の味り

風返り〜唐船破落し海に破船〜
あゆま〜浦色の村々〜陸屋を〜海舟に
す〜高揚れ事免村々の百姓小は
志隈雅の仲間り國ハ杭州寧波府の船も人救
あ〜れ者あ〜人〜とけたの人〜りザ〜大〜の方
多〜頂ふ島〜髪を〜辯髪汗腰〜岳服を
羅紗袴のものを袈衣縁衣もあゆ〜裏を多〜
獸れ皮〜各益力禮と裁ハ一向は〜衣服も
上り〜の体〜く言語ハ〜は〜長〜

往來のそれぬらうて自然とまきしもの有る
 異るをさるものるなりおひの船中承鶏飼
 ありい培漬の衣臭もれ教ね交り積荷物ハ耳
 蕨葉種結布屋沙毛纏襪と外品あり
 帆柱と櫂より帆ハ花を裂く船目小編二枚
 合せてさるふ蔭の葉種種風の面ぬやりに
 減りもの礎ハ櫂まよはけ地の紐子の形小俵り
 ののそぬふ石をさるる付るる紐と筒一尺八寸廻
 りごりて船中ふ石火矢と挺を眼洗と挺船玉と

男らんと檀たんあり天后聖母船形と親者おん別号べつごう
 祠やしろの扉七室細こまく甚こ員い麗れいなり又関帝かんていの
 像ぞう一躰たい左右童子馬一匹燈籠とうろうニツあり大本ほんの蘗くさ坊
 切口きりぐち八寸大小あり四尺よっしち小土居こつちいの行馬やらいの中なか積入せきいの
 焼物やきものありあり中なかに甚こ多たの大おほ粹すいありあり
 凡おほ古ふる年とし一ひと船中ふねなか一度いちど及およ三さん段だんあり上中じやうちゆうトあり
 水溜みづたまり二間にま四方よしかたあり一丈いちじやう程ほど右みぎの脇わきふ料理りやうり場ばあり
 さん其その厚あつ肥い前まへ長寄ながよへ送おくくありあり一ひと條ぢゆうハ
 舞まい坂さかあり甚こ多た舟ふねよりの船中ふねなかありあり合あ合あの人ひと語ごれ

しをさふ記そのまがり

競奇遺聞 卷之四終

